

## 第1章

# 中世ヒューマニズムと大学教育

### 目次

1. 初期ヒューマニズムの諸相
2. 文法教師フーゴの反論
3. グラマティカとポエティカ

香田 芳樹

——民族の思考形態は概ねその言語に依存している

クロプシュトック

## 1. 初期ヒューマニズムの諸相

本論は、初期ドイツ・ヒューマニズムに関する一般的定説を批判的に再検討し、その成立過程に従来顧みられなかった教育改革の重大な影響があったことを指摘する試みである。その際、特にドイツを考察の対象とするのは、この国のヒューマニズムが、政治的には神聖ローマ帝国の支配のもと堅固な封建体制の中で成長せざるを得なかったという点と、それが当初は伝統的キリスト教倫理と融和を図る保守的文芸運動であった点で、同時代のヨーロッパ諸国から際立った特徴を示しているからである。

ヒューマニズムは普通ルネサンスで花開く「人間性の復興・古典芸術の再評価」を準備するものとして位置づけられる。しかし、古典に現れた人間性への敬意とその復興を希求する意志は、14世紀を待たずとも、中世全般にわたって恒常的に存在した<sup>(1)</sup>。例えば、すでに9世紀のカロリング・ルネサンスと呼ばれる運動の中で、ローマの芸術形式の復興は極めて強力に推し進められている<sup>(2)</sup>。しかし、こうした中世知識人の「帰巢本能」とも呼ぶべきものをすべてヒューマニズムと名づけることはできない。なぜなら、ラテン語が知的公用語であった中世ヨーロッパでは文化は自ずから古代世界の芸術と連動しており、両者の文化的齟齬はあくまで「誤差の範囲内」だったからである。ヒューマニズムが正式に誕生するのは、こうした文化的等質性が脅かされ、異質なものと変化せざるを得ない状況にヨーロッパが陥った時であ

る。この文芸運動のもつ自己主張には、それゆえ、保守的回帰志向と革新的創造性の両面がある。とりわけ後者はルネサンスに続く発展可能な現象として強調され、ダンテやペトラルカは初期ヒューマニズムの代表者として位置づけられる。この2人の桂冠詩人に、語り部のごとく古典文学をそのまま再生させなければならないという使命感がなかったのは、ローマの末裔としての血統が保証されていたからである。これに対して、イタリアの周辺地域、特にドイツでは、ヒューマニズムはかえってローマの古典文化の復興を目指す保守的な形姿をまとった<sup>(3)</sup>。しかし、それは一般に考えられるように、宮廷や知識人たちの間の閉鎖的で復古的な原理主義ではなかったことも銘記しておかなければならない。

一般に、イタリアでは都市とそこに住む市民がヒューマニズムの発展の担い手として大きな役割を果たしたのに対して、ドイツでは宮廷での文化事業が出发点であったとされる<sup>(4)</sup>。キケロの『共和国論』を理論的支柱に、封建制からの脱却を目指したイタリア・ヒューマニズムに対し、ドイツでは当初は宮廷文化の延長上にヒューマニズムの理念が追求され、この典型としてプラハのカール4世の宮廷が挙げられる。文学史上有名なペトラルカを中心とした文芸サロンがドイツ・ヒューマニズムに土壌を提供したとされるが、しかし、こうした見解は、時代の転換と新しいエポックを切り開く原動力を一人の天才に帰しがちな、多分に時代がかった歴史観の産物ではないだろうか。ペトラルカ自身決してカールのもとで文芸復興を再演しようとしたわけではなく、プラハのサロンも彼にとってみれば当初は一種のアジュールに過ぎなかった。そのことは彼に先立って1350年にカールの庇護を求めてこの地を訪れたコーラ・デイ・リエンツォ (Cola di Rienzo, 1313-1354) を見れば明らかである。この人文主義的教養の薫陶を受けた理想主義的愛国者がカールに期待したのは、領土を分断され、古典文化の継承者としての正統の地位を追われたイタリアの復興であった。彼の熱狂的愛国心に辟易こそすれ、動かされることはなかった国王は、1351年にペトラルカからの私信を受け取り、ロー

マの栄光についての熱弁を聞いたときにも、そこにリエンツォ流の政治的野心しか感じなかった。彼がこの桂冠詩人に初めて出会うのは、1354年、神聖ローマ帝国皇帝への戴冠を受けるためにローマへと向かう途上立ち寄ったマントヴァでのことであるが、そこでペトラルカの語る古典的世界の政治的再興に関心を示したとはいいがたい。翌年戴冠を受けた皇帝は、その足ですぐさまプラハの宮廷に取って返している。バーンスタインはそれゆえ、プラハでの初期ヒューマニズムとの出会いは、帝国の周辺的なエピソードに過ぎず、ごく小さな個人的サークルに限られていた、とする<sup>(5)</sup>。彼は、イタリア・ヒューマニズムが北ヨーロッパへ版図を広げていった理由に5つの原動力を指摘する。第1に人文主義的研究 (*studia humanitatis*)。13世紀来パリ大学が神学者のメッカであったが、15世紀からはアルプス以南のイタリアの大学 (例えばボローニャやパドヴァ大学法学部) の名声がヨーロッパ全土から官吏を目指す学生を引き寄せ、人的交流が活発となっていた。第2に、知的交流に伴い、商的交易が盛んになったこと。実際ドイツの初期ヒューマニスト (*Gossembrot von Augsburg* や *Pirckheimer von Nürnberg*) は、豪商でもあった。第3に、15世紀中葉のグーテンベルクによる印刷術の発明。第4に、イタリアからの影響と並んで、ドイツ各地にもヒューマニズムを準備する土壌が育ちつつあったこと。バーンスタインはそのひとつとしてニーダーラントを中心に発生した宗教改革運動デヴォチオ・モデルナを挙げる。第5に、15世紀にドイツ語圏で相次いで開かれた公会議 (コンスタンツ 1414-1418; バーゼル 1431-1449) が、法王庁の要人と共に、多くのイタリアの人文主義者にアルプスを越える機会を与えたこと。彼らの幾人かはその間、実に4半世紀もの間、貴重な文献と共にドイツに留まることになり、計り知れない影響を当地の知識人たちに与えることになる。確かに、ドイツにおけるヒューマニズムの起源をペトラルカー一人の偉業に帰したり、カール4世の戴冠に伴うドイツ民族による神聖ローマ帝国の再興に求めるより、むしろ様々な人的・物的交流、社会・経済条件を考慮して論じる方が説得力があろう。この運動はそれ

ゆえ、間断なく緩やかにヨーロッパに浸透し、15世紀にヨハンネス・ロイヒリン、ウルリヒ・フォン・フッテン、セバスチアン・プラント、さらには16世紀にエラスムス・フォン・ロッテルダムに活動の場を与えたといえる。

このようにヒューマニズム研究の成果を一望してみると、この運動を「支えた」外的要因はある程度説明されるが、しかし、知識人たちをこの運動に「駆り立てた」内的要因については十分な説明がなされていないことに気づく。古典文化を再評価しなければならないという欲求は、決して憧憬や畏敬だけから生じたのではなく、むしろそれを許さない状況へのアンチテーゼとして表現されていることに注意しなければならない。この意味で、この文芸運動は変動する価値観の産物であるといえるだろう。ハスキンスも言うように、成熟期を迎えた中世が新しい世界像を模索し始め、政治・経済・文化の各方面で転換期を迎えたのが12世紀であった。それはある意味で中世の決算期であり、ルネサンスの先駆けであった。「ところでこの問題は、われわれの考察の対象が新たな創造ではなく知的生活の増大であること、9世紀と12世紀の間の連続性が一度も完全には断たれなかったことを思い起こせば、いくらか理解しやすくなるだろう。『中世の各世紀は、直前の時代に知られていたものを受けついただけではなく、さらに大きな宝を求めてはるかな過去にまで手をのばした』のは、一般論としてそのとおりだが、12世紀は普通以上に触手をひろげ、普通以上に多くのものを取りもどしたのだった。』<sup>(6)</sup>ハスキンスの言うように、中世の知的生活は不断の連続性の中にあり、14世紀の「クアトロチェント」が既に12世紀以来準備されているとするならば、われわれもヒューマニズムの源流をこの時期に求めているのではないだろうか。

ハスキンスが、知的理性の開花と文芸復興の機運が既に中世に存在したことを「12世紀ルネサンス」と表現したように、イギリスの高名な歴史家リチャード・W・サザンは「中世ヒューマニズム」という概念を提唱した<sup>(7)</sup>。彼は、ヒューマニズムの本質を人間性への畏敬と信頼であるとする。11世紀以

前のキリスト教倫理は、人間を墮落した「被造物」であり、神を直視する能力を失ったもの、本能と知性の絶え間ない葛藤であると定義したが、12世紀に入るとこの人間観に変化が生じる。神の「創造物」としての人間の高貴さをより強調し、現実の墮落の中においてもその尊厳に目を向ける人間観が台頭するようになるのである。このような人間性への信頼は、例えば、神学者カンタベリーのアンセルムが『プロスロギオン』（1080年頃成立）を記し、自己観察を通して自然の中にある知性的なものを発見し、さらには知性による神の存在証明を試みたことにも先駆的に現れている<sup>(8)</sup>。人間知性への信頼は現実世界の肯定へとつながる。アナール学派の泰斗・ゴッフもイタリア・ルネサンスを先取りするものとしての「中世フマニズム」の存在を認め、それが「形態美への嗜好と真の均整をめぐる精神が結びついたもの」であると。つまりヒューマニズムとは彼によれば、「理性を駆使し自然を把握する行為によって、自然そのものである人間が自然を変化させる、という確信」なのである<sup>(9)</sup>。自己を宇宙的に拡張できるという確信には二通りの表現形式が与えられるだろう。一つは、人間が自らを神に等しい存在として認識し、畏怖すべき神に親しみやすい形姿を与える方法、つまり、ギリシア・ローマ文化の文学的評価であり、もう一つは、人間の経験の中に秩序観や合理性を限りなくおし広げる科学的思考である。キリスト教の至福論とはまったく別の方法で人間性を回復しようというこれらの試みを、サザンは各々「文学的ヒューマニズム (literary humanism)」と「科学的ヒューマニズム (scientific humanism)」と名づけている<sup>(10)</sup>。この視点が革新的であることは、彼とほぼ同時にルネサンス論を発表し、そこでヒューマニズムを文献学的古典的素養の獲得を目指した文芸運動に限定して考察すべきだとしたポール・O・クリステラーの保守性と比べれば明らかである<sup>(11)</sup>。文芸復興を求める機運が単なる復古思想ではなく、12世紀以降活発になる知的合理性への渴望と複雑に絡み合っていることは見逃せない事実なのである<sup>(12)</sup>。

科学的ヒューマニズムは、歴史的には12世紀から13世紀にかけて盛んにな

る大学の創設に顕著に現れている。パリを中心とする神学大学では、神を畏怖の対象に留めるのではなく、理性によってその存在を証明しようとする努力が続けられ、スコラ学として結晶した。ボローニャに代表される法科大学では、絶対者による審判を脱して、個々の件にそって合理的に量刑を下すことのできる決疑論が考案された。また、イスラム文化の強い影響を受けた南ヨーロッパ（特にサレルノ）の大学では、人体を神の創造物ではなく、メカニズムとしてとらえる医学が発達した。つまり、自然を解明し、それを克服し、超自然へと向かう第一歩を中世の大学はヒューマニズムから学んだといえる。

しかし、これらの新興科学は近代科学の祖とはならなかった。将来を約束されていたかに見えた科学的ヒューマニズムが、14世紀頃に知的対象の減少と社会不安によって行き詰まるからである。そして、合理主義を信じて邁進した精神が普遍性の追求を断念し、世界から距離を置き、小さなサークル化したところに、サザンは文学的ヒューマニズムの新たな開始を見ようとする<sup>(13)</sup>。この理解は確かに15世紀の文芸復興の機運と時期的に符合する。しかし、このような「科学的ヒューマニズム」と「文学的ヒューマニズム」のいわば弁証法的な関係には疑問が残る。それは、中世の合理的科学主義にも様々な潮流があり、大学の学芸学部が中心になって推し進めた自由7学芸 (septem artes liberales) による実証主義や、法学・医学といった実学ばかりが科学ではなく、ギリシア・ラテンの古典的教養を見直し、応用することで、世界観を修正しようという折衷主義も大学では盛んだったからである。例えば、哲学と雄弁術はポエティウスから、倫理学はキケロから、自然学はセヴィリアのインドルスから、技術学はサン・ヴィクトワールのユーグから知恵を借りて改良しようとした。新酒を古い革袋に入れるか、それとも革袋自体を新調するかは常に論争を呼んでいたはずであり、新たな humanitas を確立するためにいわば二つのヒューマニズムは絶えざる抗争を繰り返していたと考えるのが自然である。この争いは文学作品の中にも影を落とすこととな

った。12世紀頃から、「7学芸の戦争」というテーマで書かれたいくつかの作品がそれである。例えば、アンリ・ダンデリ (Henri d'Andeli) は La bataille des sept arts の中で、悪人アリストテレス率いる論理学一派に虐待された文法を救出するために、ヴェルギリウス、ルキアヌス、ホメロスといった古代の詩人たちが奮戦する様子を描いている<sup>16)</sup>。アリストテレスの哲学は当時、合理主義的科学の代名詞であり、教会がこれに大きな脅威を感じていたことは、パリ大学に対する度重なる教授禁止令からも窺える<sup>15)</sup>。ギリシャ・ラテンの古典作家たちがアリストテレスと戦うというアレゴリーには、二つのヒューマニズムが真の人間性のあり方をめぐって確執を続けていたことがはっきりと読みとれる。

## 2. 文法教師フーゴの反論

科学的ヒューマニズムの担い手が大学の教授たちであったとすると、文学的ヒューマニズムの担い手は都市の教会付属学校の文法教師たちであった。ここでわれわれはドイツにおける中世ヒューマニズムの先駆者を訪ねてみよう。

パリ大学の主導のもと、圧倒的な牽引力で推し進められた「知の再構築」は、守旧派、つまり聖書に基づくアウグスティヌスの世界観と古典的素養の信奉者たちを学問の表舞台から放逐することになる。廃嫡を申し渡された教師たちの家督争いがここに始まる。ドイツにおける最も頑なな論客としてフーゴ・フォン・トゥリンベルク (Hugo von Trimberg) を挙げることに異論はないだろう。バンベルク近郊トイアーシュタットのザンクト・ガンゴルフ修道院学校のラテン語教師として40年勤務した彼は、2万5000行にも及ぶ

『レンナー』(1300年頃成立)の中で、ほとんど病的ともいえる執拗さで当時の高等教育を非難している<sup>16)</sup>。ここには、伝統的教育理念が、大学の新しい科学的合理性によって脅かされているのを目の当たりにした文法教師の憤りと悲嘆が読みとれる。12/13世紀のドイツにおける教育界の異変を知る上で、この作品は現場からの赤裸々な告白として貴重な資料である。

中世の学校は例外なく教会付属の機関として発足し、その上意下達の機能を果たしていたが、14世紀に入ると大都市に市民のための学校が設立されおむね実用に応じて読み書きから算術、ラテン語へいたる授業がおこなわれるようになった<sup>17)</sup>。こうした民間学校で教鞭をとったのがスコラールと呼ばれる遍歴学生やマギステルと呼ばれる教師たちであったが、彼らの中にはパリで高等教育を受けている者も少なくなかった。知的エリート集団の教育現場への進出を目の当たりにして、古典文法教師フーゴの胸中は穏やかではない。彼は、サレルノ (医学)、パドゥア (法学)、オルレアン (法学)、パリ (神学) で学ぶことは、優秀な学者 (höher meister) にのみふさわしく、自分のごとき哀れで無知な童蒙 (armer lère knabe) には畏れ多いとしつつも (v. 13950-13953)、他方で、無為徒食のパリ遊学者 (magister scholarum) が肩書きだけをちらつかせ、世渡りをする様子を皮肉たっぷりになじっている。(v. 13435-13438)

「おのれの学問 (künste) に驕り、  
神の恩寵 (günste) を乞い願わない者が、  
パリやオルレアンやサレルノで  
多くの書を読んで一体何になるのか。」(v. 13473-13476)

ここでの学問 (künste) とは、大学の学芸学部で講じられた学芸 (artes) を指す。4世紀にクインティリアヌスとマルティアヌス・カペラによって体系化された自由七学芸、すなわち、文法、修辭、弁証法の3学 (trivium) と数

学、幾何学、音楽、天文学の4科 (quadrivium) は、理性を形成するものとして13世紀初頭まで教育界を支配した。文系と理系学科の関係は当初原則として対等ではなく、自然の修辭と倫理化という古典期以来の人文的理想を追求するために3学が重視されていたが、その後、アレゴリー的世界観から脱し、科学的論拠を求める傾向が強まり、兩分野の乖離は次第に大きくなっていった<sup>(18)</sup>。晩年のアウグスティヌスが『キリスト教理学 (De doctrina christiana)』において、7学芸に対する神学の優位を強調したのはこの合理主義偏重の学問傾向に釘を刺すためであった。中世に好まれた慣用句「哲学は神学の婢<sup>はしため</sup>」は、7学芸を牽制するための神学者たちのスローガンだったが、13世紀に入ると兩分野の主従関係に大きな変化が生じる。7学芸はその哲学的・合理的思考によって神学の準備学科の地位から解放され、独立した学芸学部 (facultas artium) として自ら学士 (bakkalaureus) と修士 (magister) を輩出する権利を得る<sup>(19)</sup>。新興の学問であった学芸 (künste) が神学や法学と同等の資格として認められ、大学での講義を通して有資格者をさらに生み出すようになったことはヨーロッパの知的生活には大事件であった。

ひとり歩きし始めた学芸にフーゴーは疑問を抱く。

「この世のすべての学芸は無に等しい。

それは聖書に従わず、

奔放に突き進む。」 (v. 16577-16579)

効率至上主義は高等教育においてばかりではない。都市経済の発展に伴い、就学者の階層や年齢が大幅に広がり、都市の学校には多様な技能者を養成することが求められるようになる<sup>(20)</sup>。生徒の授業料に生活の資の大半を依存するマギスターたちは、市民社会の要請に応じた知識の提供を迫られるようになる。聖書倫理に基づいた古典的教養は、その一元性ゆえに多様化する科学とは必然的に衝突する<sup>(21)</sup>。

「ひとかどの学者たらんとする者は  
あれもできる、これもできると言いたがる。  
こうした輩にはまったく分かっていない。  
何をもって学者たるのか。  
人望を集め、聴衆を集めるものが  
何なのかを。」 (v. 13460-13465)

「この世には学芸があまはびこるが、  
われわれの主はこれらを快く思い給わない。  
学芸と貴族と財貨は無に等しく、  
われわれの主を見出さない。」 (v. 13413-13416)

科学とはフーゴーにとって都市貴族 (adel) や蓄財 (schaz) と同様、13/14世紀に顕著になった初期資本主義社会を象徴するものに他ならなかった。競争原理に支配された科学のもとで学者たちは論争に明け暮れる。

「自分の学問からは  
財産も栄誉も知恵も  
得ることのなかった者が、  
往々にして他人<sup>ひと</sup>の学問を誹謗する。  
妬みで学問は身をもち崩した。」 (v. 13465-69)

新しい学問によって人の心に植えつけられた妬み (nit) と驕慢 (hōchfart)こそが神的英知から人を遠ざけた、とフーゴーは言う。(v. 2891-2892) それ故、科学とは先人の知恵を足蹴にして、跳ね駆け廻り<sup>いなな</sup>、嘶く「盗賊の馬 (rouber gurren)」ということになる。(v. 16561-16564)

増長する科学 (künste) を批判し、謙虚で単純な神の教え (günste) を擁護するために、フーゴーは他ならぬラテン文学を学び、古典的素養を身につけることを推奨する。キリスト教倫理に古典ローマの倫理がどのように接ぎ木されて調和していったかについては後に詳述するが、多少の摩擦はあったにせよ、後者は前者を補完するものとして受け入れられていた。フーゴーにとっても耳を傾けるべき先哲とは、一方でアウグスティヌス、ヒエロニムス、グレゴリウス一世といった教父であり、他方でプラトン、アリストテレス、ヴェルギリウス、ホラチウス、ユベナリウス、セネカ、プリスキアヌス、ドナティウスといった古代の思想家たちである。問題はこの異教思想をどのようにキリスト教に取り込むかである。

「学問が聖書に誤った混じり方をする  
毒になる。ユダヤの教えも異教の賢者たちも  
われわれに物の理を教えてくれた。  
しかし彼らもいくつかの点で盲目である。  
なるほど深くは探るが、  
熟慮が足りない。  
プラトン、アリストテレス、  
セネカ、ソクラテス、  
デモステネス、ディオゲネス、  
トゥルス、エンペドクレスといった  
古の学匠たちである。」(v. 8447-8457)

フーゴーはまた別の箇所で、古典語の習得をないがしろにして、「酒場で教師と民衆語で語る」学生を非難しているが、こうした不満の背景には、彼の「文法」に対する特別な思い入れがある。グラマティカとは、自然言語としてしか存在しない民衆語に対し、規範をもち、規則によって統御された言

葉 (lingua regulata)、つまりラテン語をさす。これはもちろん古典文学を豊かに盛る器であるがゆえに媒体として重要であるが、それ以上に、堅固な規範性によって人間の理性を頹廃から守るものとして独自の教育的意義をもっていた<sup>22)</sup>。自由7学芸の中で3学(文法・修辞学・弁証法)が、基幹学科として重要な役割を果たした理由はここにある。科学・芸術の分野へ民衆語が進出していった13/14世紀になると、ラテン語のこうした社会教育的機能は知識人の間で一層強調されるようになる。『レンナー』の中でフーゴーはドイツ語の方言を蛮語として軽蔑的に取り上げ、その無規範性を列挙している<sup>23)</sup>。つまり、方言の乱れの中に彼は混沌とした世界の無秩序と同時代人の粗野が特徴的に現れているのを見ようとしたのである。また、ラテン語は大学の新興科学の特殊性と利潤至上主義に対抗し、古典のもつ均衡のとれた美を知的生活の中心に据える役割を果たし、学問を純粹に精神の業とするものである。この点で、フーゴーの言語観は、彼が師と仰いだクインティリアヌス(紀元30/40年-100年以前)のそれに近い。この稀代の文法学者は、自由学芸において文法の初歩を軽視することを戒めるが、それは「子音と母音を区別したり、子音をさらに半母音と無声子音に分けたりすることが重要な仕事だからではなく、いわばその聖なる場所の内奥に分け入ってくる者に、多くの精緻な内容が明らかになってくるからである。そして、この精緻な内容は少年の才能を磨くだけではなく、深い教養と学識を養う」からである<sup>24)</sup>。それ故、「文法への愛着と読書の習慣は学校時代をもって終わるのではなく、人の一生とともに終わる」のである<sup>25)</sup>。この精神は、中世を通して好まれた慣用語「文なき人生は死である (vita hominis sine literis mors est.)」に代表される人文主義の教育理念となっていく。

### 3. グラマティカとポエティカ

フーゴーの言う「老いも若きもが」「一途に恋い焦がれた美貌の乙女」(v. 22345-22347)である文法が大学から逐われたことは、教育が歴史の中で培った伝統的「知恵」を放棄し、分析によって得られた明証的なデータを特定の原理のもとに構築し、知のハイエラルキーを作り上げようとしたことを示している。それでは、『レンナー』の「徳育 (schulzuht)」と「技能 (künste)」は歴史的に見て学校教育の中でどのような位置関係にあったのだろうか。フーゴーの künste 批判は、1) 科学の特殊性、2) 科学の経済効率至上主義、3) 伝統的知恵の軽視に主として向けられているが、これは12世紀のイギリスの先駆的ヒューマニスト、ソールズベリのジョン (1115/20-1180) がコルニフィキウス派と呼ばれる知識人層を批判した文言と酷似している。そこで彼はフーゴー同様、古典文学を軽視して読まない者たちが虚栄心に満ち、手っ取り早く弁証術を修得し、パリやシャルトルで教職を得て、知識の売り食いをしていることを非難している<sup>26)</sup>。こうした人々は自分が「巨人の肩に乗った小人に過ぎない」<sup>27)</sup>ことを忘れていた。古典を通してこそ、「かつて多くの人々が全生涯をかけて探求し、発見に努力してきたことを今では一人の人がすばやく容易に学べる」<sup>28)</sup>のである。ジョンのこうした批判の背景には、合理的理性による人間理解、つまり哲学が、人間の徳の涵養や生の充実を助けないのではないかという不信感がある。彼にとって学問の最要件とは「人生を支えること」であり、「倫理」を確立することであった<sup>29)</sup>。あらゆる哲学的合理主義的思考は倫理的原理に従わなければならない<sup>30)</sup>、という訴えはもちろんヒューマニズム特有のものではない。アリストテレスを始めケクロといっ

た倫理学の著者たちにとっても国家と倫理の問題は重大な関心事であったし、アウグスティヌスに代表される教父たちによって確立した神の国の法としてのキリスト教倫理は精神生活の規範として永く中世を律してきた。しかし、こうした政治倫理や宗教倫理とは別の性格をもつ「詩的倫理」が存在することを看取したのが中世のヒューマニストたちであった。例えば、詩に倫理性を追求することが、ダンテにとって『神曲』執筆の動機となったことを思い出してみればよい。

天を詩に歌い、地を詩に歌うこの神曲のために  
 長年私は彫心鏤骨<sup>ちようしんるこつ</sup>の苦心を重ね、身も痩せ細ったが、  
 昔、まだ仔羊であったころの私が寝ていた  
 あの高い羊小屋から私を閉めだした  
 邪<sup>よこしま</sup>な狼たちの残酷無法を、  
 もしこの詩がうち破ることがあるならば、  
 その時は、声も髪も昔とはうって変わったが、私は  
 そこへ詩人としてまた戻り、私の洗礼堂の泉の前で  
 冠<sup>こうべ</sup>を頭にいただくこととなるだろう<sup>31)</sup>。

古典文学においてもポエティカは現代とはまったく違う機能を持っていた。それは、美的感性の表出であるだけでなく、倫理的価値の担い手でもあった。例えば、トゥルネのエティエンヌの次の一節はそのことをよく表している。

ポエジーとは、韻の中に重要で含蓄のある話しを織り込んでいく科学である。それは風刺によって悪徳を抑え、美德を混ぜる。悲劇によって労苦に耐える力と運命を憎む気持ちを養う。一般にポエジーとは、強さと弱さの類型を提示するものである<sup>32)</sup>。

ポエジーは強さ（美德）と弱さ（悪徳）の類型を提示することで、倫理を社会的に実践するものであるという理解は、イタリアの初期ヒューマニストであり桂冠詩人でもあるアルベルティーノ・ムッサトー（1261-1329）にもはっきり見られるし、またそれはルネサンス、バロックからロマン主義に至るまでの共通の芸術観であった。たとえば、バロックの人文主義者マルティン・オーピッツの「ポエジーは初めは秘められた神学であり、神の業を教授するものであった」という一節も、ギリシャ・ローマの詩人たちが予言者と同等の地位を得ていたことを踏まえている<sup>33</sup>。詩とは神々の所有物であり、美と倫理の調和だったのである。

しかし、古典作家の「詩的倫理」を学校の正課として学ぶことは中世では永らくタブー視されてきた。それは、キリスト教倫理の支配下では異教の文学が真理の一端に触れはするが不完全なものと見なされていたためであり<sup>34</sup>、また社会的利害から「自由な」純粹理論（theoretica）である自由7学芸の中に、実践（practica）を目的とする倫理の入り込む余地がなかったからである<sup>35</sup>。このように古典的素養は科学の表舞台にでることはなかったが、しかし、それを学ぶことは創世記やその他の予言者の書をよりよく理解するのに必要なものとして認められていたのも事実で、ヴェルギリウス、ユベナリウス、ホラチウス、ルキアヌスは文法の読本として熱心に読まれた<sup>36</sup>。それらを通して修得された雄弁術、修辞法、文法は聖書の理解に不可欠であることは衆目の一致するところであったため、それを口実にして教会の中で公然と前（非）キリスト教文学に接することができたのである<sup>37</sup>。こうした「パガニズム」と呼ばれる折衷主義が中世を通して存在したことは、ヒューマニズムがヨーロッパ精神史の突然異変ではなく、永い準備期間を経たものであったことを示している。この潜在的なラテン文学への愛着を一気に顕在化させた理由の一つに「学の再編」があった。この過程で推し進められた技術知、実学を従来の7学芸に組み込もうという動きが顕著になる。論理学、

倫理学、自然学を加えた10学芸の理念はオータンのホノリウスをはじめとする様々な思想家によって提唱されたが、その新設学科はギリシャの実証哲学に基礎を置くものであった。12世紀に書かれた次の韻文詩は、この3つの新設学科が既存の科学と対等な地位を得つつあったことを物語っている。

乾ける者たちよ、哲学の食卓に急げ。

そして、三通りの味の七つの川から飲め。

それは一つの泉から流れ出すが、別々に流れる。

自然学の川をピタゴラスは入念にあがめ、

ソクラテスとプラトンは倫理の川を讀え、

アリストテレスは雄弁に論理の川を讀えた<sup>38</sup>。

徳の涵養がこうした科学の合理化と技術化が進行する過程で否定されるのを目の当たりにして、それに代わる学問を早急に見つけ出さなければならないという危機意識が初期のヒューマニズムの根底に芽生えたことは間違いない。そうした動きの中で、それまで聖職者教育の副教材程度の意味しかもたなかった古典文学がその詩的な倫理性のゆえに反科学万能主義の旗手となり、また、それまで3学の一つに過ぎなかった文法が重要な媒介者となっていく。ヒューマニズムの目指す美的・倫理的原理の探求が文法教師たちによって推し進められたことに特に注目しなければならない。美・倫理・言語のトライアド（3肢構造）が完成するところにヒューマニズムが成立する。これは初期ヒューマニズムの発生と軌を一にして、13世紀に言語改革運動が起こったことに顕著に現れている。ゲルマン語を母語とするドイツ、イギリスでヒューマニズムが復古的なラテン主義となっていくのは、ラテン語の修辞法を民衆語に移植することが難しかったからである<sup>39</sup>。これは同じロマンス語系に属しつつもラテン語との懸隔が大きくなり過ぎたフランス語についても同様である。これに対して、諸方言にまだ幾分ラテン語の残響が保たれて

いるイタリアでは、民衆語を改良して、修辞・雄弁に耐える詩的言語を創造しようという言語改革運動が生じた。その代表例として、ダンテの『俗語論 (De vulgari eloquentia)』を挙げることに異論はあるまい。『神曲』の作者はそこで極めて科学的手法でイタリア語を分析しているが、これはイタリア語の諸方言をラテン語に従属させるためではなく、むしろ、民衆語の正統性を認め、それが高度な文学作品を創造する能力を内に秘めていることを明らかにするためである<sup>(40)</sup>。彼は『神曲』の中で民衆語に対する信頼をアダムに託して次のように表明する。

人間が口をきくというのは自然がする行為だが、  
しかしどのように話そうか、その話し方は君らのよいように  
君らが自然から裁量を委ねられている。[……]  
人間の習俗は枝から木の葉が  
一枚散り、また一枚生えるようなものだ、だから  
そうした変化も当然の成行というべきだろう<sup>(41)</sup>。

しかし、民衆語が神から賜った「自然言語 (locus naturalis)」であり、「潜在的に優れている」ことにダンテが気づくには長い熟考を要したことも併せて銘記する必要がある。『俗語論』に先だって書かれた『饗宴』では、規範をもたない俗語に対して、芸術によって規則づけられたラテン語は「顕在的に優位にある」とし、彼がまだ詩的言語としてのラテン語に可能性を見ていたことを窺わせる<sup>(42)</sup>。

\*

ローマ人にとっての民族結束のための紐帯であったラテン語は中世の千年を経て、ヨーロッパ共通の文化的きずなに成長していた。中世人たちは、こ

の言語を通してのみ古典の「詩的倫理」を取り戻すことができ、またキリスト教国の構成員としての自覚を強めることができた。それゆえ、ヒューマニズムが発展の初期段階において、国家・民族を越えたメタ言語の護持に向かうか、または、その改良に努めたのは当然であった。カール・オットー・アーペルも言うように、ヒューマニズムの基本理念はこの意味で「言語ヒューマニズム (Sprachhumanismus)」であるといえる。桂冠へと続く道の途上でダンテが民衆語からラテン語への岐路に立ったように、ドイツの初期ヒューマニストたちも同じ岐路に立っていた。彼らを選んだ道はフィレンツェ、ローマへと続く明るいルネサンスの道ではなかったが、それはヨーロッパを北上し、ロイヒリン、エラスムスに至り、16世紀のヒューマニズムへと架橋したのである。

#### 注

- (1) アーサー・G・ディキンズ (橋本八男訳) 『ヨーロッパ近世史・ユマニズムと宗教改革の時代』芸文出版、1979年、139ページ以下。
- (2) 伊東泰治「12世紀ルネサンスとドイツ宮廷文学」『中部大学国際関係学部紀要』第8号、1992年、47-67ページ。ラテン作家の現存する写本数が9世紀、12世紀、15世紀に急増することからも彼らが文芸復興の象徴的存在であったことを物語っている。
- (3) ホイジンガも、イタリアとフランス・オランダとの間でヒューマニズムの成立・発展に大きな違いがあるとする。イタリア語はラテン語との齟齬が少なく、また、文化的にイタリア・ヒューマニズムはラテン文化の安定した発展形態であった。これに対して、フランス・ブルゴーニュ地方では、文化はまだ中世的であり、新しいより洗練された表現形式を求める努力は、完全に古典的な形で現れた。つまり、「修辞」を通して中世の伝統的表現形態をさらに推し進めるもので、内的な革新性には支えられていない。本質的革新にはエラスムスの登場を待たなければならなかったのである。ヨーハン・ホイジンガ (堀越孝一訳) 『中世の秋』中央公論社、1968年、578ページ。
- (4) Thomas Cramer, *Geschichte der deutschen Literatur im späten Mittelalter*, München, 1990, S. 349.
- (5) Eckhart Bernstein, *German Humanism*, Massachusetts, 1983, p. 7.
- (6) チャールズ・H・ハスキンス (別宮貞徳・朝倉文市訳) 『十二世紀ルネサンス』み

すず書房、1991年、11ページ。

- (7) Richard W. Southern, "Medieval Humanism", *Medieval Humanism and other Studies*, Oxford 1961/1984, pp. 29-60. 中世ブームと言われる現在、「暗黒の中世」という語は死語になってしまったが、中世に対する偏見が蔓延していた60年代には「中世ヒューマニズム」という表現はセンセーショナルでさえあった。中世が歴史の暗い停滞期であるという通説をつくったのはルネサンス期のイタリア人であることを銘記しなければならない。つまり、彼らには、5世紀のローマ帝国の滅亡以来暗く閉ざされた歴史が自分たちの功績でふたたび光を取り戻したという自負から、必要以上に中世を過小評価する必要があったのである。同様の指摘は、ディキンズ、7ページ参照。
- (8) 聖アンセルムス（長沢信寿訳）『プロスロギオン』岩波書店、1987年。
- (9) ジャック・ル・ゴッフ（柏木英彦訳）『中世の知識人』岩波書店、1975年、79ページ。但し、筆者の責で訳文の字句を改変した。ル・ゴッフはここで特に、ドイツの女性神秘思想家ヒルデガルト・フォン・ビンゲンがマイクロコスモス（小宇宙）としての人間がマクロコスモス（大宇宙）と緊密に結びついているという世界観を提示したことを強調している。
- (10) Southern, 前掲書、pp. 29f., 38f.
- (11) Paul Oskar Kristeller, *Renaissance Thought*, New York 1961, pp. 3-23. ちなみに、サザンの論文の初出は1964年である。
- (12) 科学の舞台でも、12世紀にハスキンズのいうルネサンスがあったことは次の書に詳しい。Peter Weimar, (Hrsg.), *Die Renaissance der Wissenschaft im 12. Jahrhundert*, Zürich, 1981.
- (13) Southern, 前掲書。
- (14) Louis John Paetow, *The Battle of the Seven Arts*, Berkeley 1914.
- (15) Kurt Flasch, *Aufklärung im Mittelalter? Die Verurteilung von 1277*, Mainz, 1989.
- (16) Gustav Ehrismann, (Hrsg.), *Der Renner von Hugo von Trimberg*, (Nachdr. d. Ausg. von 1908, 1911), 4 Bde. フーゴー自身による略歴は24560-24566行を参照。また、表題のDer Rennerの意味ははっきりしないが、「キリスト教擁護に東奔西走する者」とであるという解釈や、作品が好評を博し各地に写本がパンフレット（フランス語 courier）として流布したことによるという説などがある。Gustav Ehrismann, "Hugo von Trimbergs Renner und das mittelalterliche Wissenschaftssystem", *Aufsätze zur Sprach- und Literaturgeschichte (Fs. f. Wilhelm Braune)*, Dortmund, 1920, S. 211-236. 13世紀中葉から世俗権力（皇帝フリードリヒ2世）から特権を得て遠方貿易を中心に発展していたハンブルク市に対し、司教の直轄領であったトイアーシュタットでは都市型市民社会に対する反感が強く支配

していた。市民による経済活動や金融業、都市貴族に対するフーゴーの非難には、彼の直接の雇用者である教会の利害が代弁されているのかもしれない。Winfried Frey, "Schule und Ausbildung im 13. Jahrhundert. Die <Lehrerklage> im <Renner> Hugos von Trimberg", *Literatur in der Schule*, Bd. I (Hrsg. v. Brackert u. a.), München, 1973, S. 163-230, 特に S. 181.

- (17) Cramer 1990, S. 244. エアランゲン大学所蔵の小プリスキアヌス註解（作者未詳 Cod. 213）は、子供の教育をその成長に従って7年ずつの2期に分け、それぞれに適した教材を与えるように指示している。「子供は最初の7年間では他のどの期間より以上に読むことを教えられなければならない。その後、この期間に言葉の意味を知るために物語り（fabulas）を聴かななければならない。[……] そして、第2の7年間から第3に到るまでは、子供は様々に成長するので、様々な学問によって教育されるべきである。」Heinrich Roos, "Die Stellung der Grammatik im Lehrbetrieb des 13. Jahrhunderts", *Artes liberales*, hg. v. Josef Koch.
- (18) プトレマイオスやストラボンの地理学はユリウス・ソリヌスのそれに、ローマ史家による歴史学はオロシウスのそれに、アウグスティヌスの護教論は民衆版護教論にとって代わられた。Flasch, 前掲書、140ページ。
- (19) 学芸学部では、学生は予備試験の後に討論（disputatio）を行い、これに合格すればbakkalaureusとして規定の講義をすることが許された。2年にわたり支障なく講義を行えば、学芸学部のmagisterの称号が授与された。Flasch, 前掲書、259ページ。
- (20) Frey, 前掲書、185および211ページ。
- (21) Jutta Goheen, *Mensch und Moral im Mittelalter. Geschichte und Fiktion im Hugo von Trimbergs "Renner"*, Darmstadt 1990, S. 2: 「ミネザンクや説話文学が宮廷一騎士の価値観を代弁し、知恵文学が普遍的人間の『超階級的』モラルを代表しているというのが通説であるが、それでは後者の文学の世界像である多様化した階級秩序はこうした普遍性とどのように折り合うのであろうか。」
- (22) 特にキケロがラテン語を「異教徒（ギリシヤ人）の知恵を盛る器」と考えたことを思い起こせばよい。Cicero, *De finibus bonorum et malorum*, I, 2, 4.
- (23) Der Renner, v. 22253ff.
- (24) Quintilianus, *Institutio oratoria*, I, 4, 6. クインティリアヌス（小林博英訳）『弁証法の教育1』（世界教育学選集）明治図書、1980年、48ページ。
- (25) *Ibid.*, I, 8, 12. クインティリアヌス、前掲書、91ページ。
- (26) ソールズベリーのジョン『メタロギコン』1巻、1-4。田中峰雄『12世紀ルネサンスとソールズベリーのヨハネス』、『知の運動：十二世紀ルネサンスから大学へ』ミネルヴァ書房、1995年収録。59-60ページから引用。
- (27) 『メタロギコン』、前掲書3巻、4。このよく知られた言葉は、本来はシャルトル

のベルナルの言葉である。ハンス・リーベシュツ (柴田平三郎訳)『ソールズベリのジョン：中世人文主義の世界』平凡社、1994年。

- (28) 『メタロギコン』、前掲書同箇所。ダンテも『モナルキア』の中で、「誰がアリストテレスがすでに説明したことをもう一度説明しようとするのか。誰がキケロがすでに完成させた古き時代の弁明をもう一度企てようか。このような無用な試みを厭わしいだけだ」としている。
- (29) ソールズベリのジョン、前掲書序文。また、ル・ゴッフ、前掲書、75ページ参照。
- (30) ソールズベリのジョン、前掲書1巻24。
- (31) ダンテ (平川祐弘訳)『神曲』河出書房新社、1996年。「天国篇」第25歌。
- (32) Étienne de Tournai, *Ysagoge in theologiam*. 引用は Landgraf, A.: *Écrits théologiques de l'école d'Abélard* (Spicilegium sacrum Lovaniense 14) Louvain 1934, p. 71. による。
- (33) Martin Opitz, *Poeterei*. Cap. II. これをハーマンも第5書簡 (Nedler II, 365) で引用している。エルンスト・ローベルト・クルティウス (南大路振一訳)『ヨーロッパ文学とラテン中世』みすず書房、1971年。323ページ註7。
- (34) 例えば、アルクインは797年にリンディスハルネの司教に宛てた抗議の手紙で、「聖なる食卓では神の言葉が朗読されなければならない。朗読であって、堅琴の演奏を聴くのはふさわしくない。教父の説教であって、異教徒の歌謡 (carmina gentilium) ではない。キリストとヒュエルスがどうして同居できようか。神の家は両方を同時に取るには狭すぎるのだ」としている。Monumenta Germaniae Historica. Epist. Merov. et Carol. aevi IV, Nr. 124. 引用は、Walter, Haug *Literaturtheorie im deutschen Mittelalter*, 1985, S. 25. による。聖職者たちのラテン文学への警戒心については Haug の同掲書 S. 30f. を参照。
- (35) トマス・アキナスは『神学大全』(第57問題、第3項、第3答)で自由7学芸を定義して、「[数えたり計測したりする]作業に必要な思弁的理性的の習慣は、類推から技術 (artes)、つまり自由学芸 (artes liberales) と呼ばれる。それが『自由な』といわれるのは、肉体労働に必要な技術から区別するためである。肉体労働が奴隷的 (serviles) であるのは、肉体が精神に従属する奴隷であり、人間は精神の上で自由だからである」と言っている。
- (36) Georges Duby, *Die Zeit der Kathedralen. Kunst und Gesellschaft 980-1420* (Le temps des cathédrales. L'art et la société, 980-1420), Frankfurt a. M., 1994, S. 40f.
- (37) 聖堂付属学校校長マインハルト (在任1057-1085) は、例えばキケロの『トゥスクルム談義』を聖アウグスティヌスの殿堂に入る「前の間」として、生徒たちに積極的に読むように勧めている。Schröder, 1955, S. 242ff. 12世紀のヒューマニストたちは、世俗のラテン文化・異教のギリシャ文化への愛着を正当化するため

に、聖書の故事を引き合いに出した。例えば、ユダヤ人はエジプトを脱出するときに、金と銀の瓶を盗んだことから、キリスト教徒も異教徒から知恵の金と雄弁の銀を盗ることが許されているとするものや、ユダヤの男がカナンの女と結婚するとき、彼女の頭を剃り爪を切ったという記述が、古典作品の不要な箇所を削除し改作する権利を正当化するものと主張したのである。Philippe Delhay, 'Grammatica' et 'Ethica' au XII<sup>e</sup> siècle, *Recherches de Théologie ancienne et médiévale*. 25 (1958), p. 71.

- (38) Delhay, 前掲書、62ページ。
- (39) Karl-Otto Apel, *Die Idee der Sprache in der Tradition des Humanismus von Dante bis Vico*, Bonn, 1975, S. 102. 近世以降、ドイツ語が古典語文法を踏襲しながら発展していったことについては以下の書を参照：高田博行『ラテン語の鏡に映じたドイツ語—近世における言語の比較と評価—』、『ドイツ文学』98号 (1997)、1-10ページ収録。
- (40) Dante Alighieri, *De vulgari eloquentia*, I, 1, 3. これはディキンズの言葉を借りれば、「ユマニズムの特質は、ユマニズムが俗語文学と融和していった過程に見いだされ、そしてまた、中世初期にはみられなかった新鮮な社会的・文化的価値を生むようにユマニズムが与えつづけた不断の刺激の中に見いだされるのである」ということになる。(8ページ)
- (41) ダンテ『神曲』「天国篇」第26歌。
- (42) Dante, *De vulgari eloquentia*, I, 1, 3.